

5. 国際交流

(1) 外国人特任教員プログラム

センターは1978年以来、研究体制の充実と国際交流の促進のため毎年3名～6名程度の、旧ソ連・東欧地域の人文・社会科学分野を研究テーマとする外国人特任教員(外国人研究員)を公募により海外から招へいしている。滞在期間は3～10ヵ月。

特任教員には給与のほか、往復の赴任旅費、市価より安い大学内の宿舎、パソコン付の個室オフィスが与えられる。また、予算の範囲内で国内出張旅費が支給される。

義務としては、少なくとも2度の、日本国内での公式な研究発表、またセンターの欧文学術雑誌 *Acta Slavica Iaponica* への投稿が求められている。

以下は、2006～2012年度外国人特任教員の一覧と研究活動の概要である。なお、滞在中の発表と帰国後の代表的業績は、網羅的なものではない。

2006 年度

氏 名 : コズロフ・セルゲイ(Kozlov Sergei)
所 属 : サンクトペテルブルグ国立大学歴史学部教授
滞 在 期 間 : 2006年7月～2007年3月
研 究 テ ー マ : ロシアの歴史意識における「内」と「外」:ロシア人旅行者の目から見た西洋および東洋の近代
滞 在 中 の 発 表 : 「近代ロシアの旅行者たち:帝国の眼差かコスモポリタンの感覚か(ロシア語)」(冬期国際シンポ 12月14日); 「«Свой» и «чужой» в восприятии русского путешественника нового времени」(ロシア史研究会例会 2月)

氏 名 : ス・フェンリン(Su Fenglin)
所 属 : 中国黒龍江省社会科学院ロシア(シベリア)研究所・所長
滞 在 期 間 : 2006年6月～2007年3月
研 究 テ ー マ : 17-19世紀の極東における清露関係
滞 在 中 の 発 表 : 「中ロ関係:歴史・現在・将来(ロシア語)」(夏期国際シンポ 7月7日)

氏 名 : ポーティ・ラースロー(Póti László)
所 属 : ハンガリー国立防衛大学戦略防衛研究センター上級研究員
滞 在 期 間 : 2006年6月～2007年3月
研 究 テ ー マ : 21世紀初頭におけるロシア＝中欧関係
滞 在 中 の 発 表 : 「裏庭の再発見:ロシア外交における中欧(英語)」(夏期国際シンポ 7月6日)
帰国後の代表的業績: László Póti, “Evolving Russian Foreign and Security Policy: Interpreting the

Putin-doctrine,” *Acta Slavica Iaponica* 25 (2008), pp. 29-42.

2007年度

氏名 : パヴロフ・ドミトリー (Pavlov Dmitry)

所属 : モスクワ工科大学ロシア史・法講座教授

滞在期間 : 2007年6月～2008年3月

研究テーマ : ロシアと日本の日露戦争期における思想宣伝活動面での対立

滞在中の発表 : 「極東でのロシアの秘密作戦: 1904～1905: A. I. パヴロフと『上海機関』」(冬期国際シンポ 12月7日); 「“Christianity Question” during the Russo-Japanese War, 1904-1905, Or Whether Japan Really Planned to Become a Christian State」(国際ワークショップ「ロシア帝国論再考」、大阪大学 12月9日)

帰国後の代表的業績 : Павлов Д. “«Христианский вопрос» в годы русско-японской войны 1904-1905 гг., или планировала ли Япония сделаться христианским государством? (по материалам мировой печати),” *Acta Slavica Iaponica* 26 (2009), pp. 47-84.

氏名 : レムニョフ・アナトリー (Remnev Anatoly) (2012年1月24日逝去)

所属 : オムスク国立大学歴史学部教授

滞在期間 : 2007年6月～2008年3月

研究テーマ : ロシア内アジア地域における帝国の政策: 19世紀～20世紀初頭の諸思想と行政諸慣行

滞在中の発表 : 「アジア・ロシア: 19～20世紀初頭の帝国地理における植民と『ロシア化』(ロシア語)」(冬期国際シンポ 12月6日); 「Император – генерал-губернаторы – министры: административный треугольник для Азиатской России」(国際ワークショップ「ロシア帝国論再考」、大阪大学、12月9日); 「Caucasian Committee: In Search of Imperial model for Rule」(コーカサスに関する特別セミナーin札幌 1月28日)

帰国後の代表的業績 : Ремнёв А.В. Самодержавное правительство: Комитет министров в системе высшего управления Российской империи (вторая половина XIX–начало XX века). М.: РОССПЭН, 2010. 510 с.; Anatolii Remnev, “Colonization and ‘Russification’ in the Imperial Geography of Asiatic Russia: From the Nineteenth to the Early Twentieth Centuries,” in Uyama Tomohiko, ed., *Asiatic Russia: Imperial Power in Regional and International Contexts* (London: Routledge, 2011), pp. 102-128; Ремнев А. “«Тигр, заколотый гусиным пером». Казус западносибирского генерал-губернатора князя П.Д. Горчакова,” *Acta Slavica Iaponica* 27 (2009), pp. 55-75.

氏名 : スルタンガリエヴァ・グルミラ (Sultangaliyeva Gulmira)

所属 : アクトベ教育大学歴史学部教授(カザフスタン)

滞在期間 : 2007年7月～2008年3月

研究テーマ : 18世紀～20世紀初頭の西カザフスタンとウラル・ボルガ地域における帝政ロシアの国家政策

5. 国際交流

滞在中の発表：「Синхронность политики Российской империи по отношению к тюркоязычным народам Волго-Уральского региона и Казахстана в XVIII-XIX вв.」(ロシア史研究会大会、早稲田大学 11 月 11 日)；「ロシア帝国とカザフ草原におけるタタール人の仲介活動：相互作用と排斥の政策(18 世紀後半～20 世紀初頭)(ロシア語)」(冬期国際シンポ 12 月 6 日)；「Мусульманские благотворительные общества Волго-Уральского региона и Западного Казахстана (конец XIX–начало XX вв.)」(国際ワークショップ「中央ユーラシアにおける帝国統治：編入と疎外」、京都外国語大学 12 月 10 日)

帰国後の代表的業績：グルミラ・スルタンガリエヴァ(宇山智彦訳)「南ウラルと西カザフスタンのテュルク系諸民族に対するロシア帝国の政策の同時性(18-19 世紀前半)」『ロシア史研究』82 号、2008 年、61-77 頁；Султангалиева Г. “Казахское чиновничество Оренбургского ведомства: формирование и направление деятельности (XIX),” *Acta Slavica Iaponica* 27 (2009), pp. 77-101; Gulmira Sultangalieva, “The Russian Empire and the Intermediary Role of Tatars in Kazakhstan: The Politics of Cooperation and Rejection,” in Uyama Tomohiko, ed., *Asiatic Russia: Imperial Power in Regional and International Contexts* (London: Routledge, 2011), pp. 52–79; Султангалиева Г.С. Торговый рынок Южного Урала и Западного Казахстана: вопросы межрегионального взаимодействия (вторая половина XVIII – XIX в.) // Волго-Уральский регион в имперском пространстве: XVIII – XX вв. / Под ред. Наганова Норихиро, Усмановой Д.М., Хамамото Маами. М.: Вост. Лит., 2011. С. 14–38.

2008 年度

氏 名 : キム・ゲルマン(Kim German)

所 属 : アル・ファラビ名称カザフ国立大学朝鮮研究部長

滞 在 期 間 : 2008 年 11 月～2009 年 3 月

研 究 テ ー マ : ポスト・ソ連期における少数民族のディアスポラ形成:ロシア、カザフスタン、ウズベキスタンの朝鮮人

滞在中の発表：「Русскоязычный интернет, как инструмент российского влияния в постсоветской Центральной Азии (на примере Республики Казахстан)」(スラブ・ユーラシア研究東アジアコンファレンス 2009.2.6)；「中央アジアの朝鮮：民族的アイデンティティと意識の変容」(北海道スラブ研究会 3 月 13 日)

帰国後の代表的業績：German Kim, “Education and Diasporic Language: The Case of Koreans in Kazakhstan,” *Acta Slavica Iaponica* 27 (2009), pp. 103-123.

氏 名 : ミッソノヴァ・リュドミラ(Missonova Liudmila)

所 属 : ロシア科学アカデミー民族学・人類学研究所上級研究員

滞 在 期 間 : 2008 年 6 月～10 月

研 究 テ ー マ : ツングース民族史に関連したウィルタについての包括的研究

滞 在 中 の 発 表 : 「トナカイ飼育業とサハリン・ウィルタのアイデンティティ(ソヴィエト～ポスト・ソヴィエト期)

(ロシア語) (センターセミナー 10月23日)

帰国後の代表的業績: Миссонова Л. “Оленеводство и идентичность уйльта Сахалина (советский и постсоветский периоды),” *Acta Slavica Iaponica* 27 (2009), pp. 177-199; Миссонова Л.И. Этническая идентификация населения Сахалина: от переписи А.П. Чехова 1890 года до переписей XXI века. М.: Ин-т этнологии и антропологии РАН, 2010. 88 с.; Миссонова Л.И. Лексика уйльта как историко-этнографический источник. М.: Наука, 2013. 333 с.

氏 名 : レンナー・アンドレアス(Renner Andreas)

所 属 : ケルン大学ゲルダ・ヘンケル研究員

滞 在 期 間 : 2008年11月～2009年3月

研 究 テ ー マ : 戦時中におけるロシア人医師

滞 在 中 の 発 表 : 「Lost in Transition. Russian and Soviet Travelogues, 1900-1960」(センターセミナー 3月10日)

帰国後の代表的業績: Andreas Renner, “Progress through Power? Medical Practitioners in Eighteenth-century Russia as an Imperial Elite,” *Acta Slavica Iaponica* 27 (2009), pp. 29-54.

氏 名 : シュカロフスキー・ミハイル(Shkarovskiy Mikhail)

所 属 : サンクトペテルブルグ国立中央文書館主任研究員

滞 在 期 間 : 2008年6月～2009年2月

研 究 テ ー マ : 第2次世界大戦期におけるドイツ、イタリア、日本における正教会政策

滞 在 中 の 発 表 : 「スターリニズムと教会(ロシア語)」(スラブ世界の中のロシア、ロシアの中のスラブ世界研究会 7月26日); 「Миссионерская деятельность Русской Православной Церкви в XX веке」(スラブ・ユーラシア研究東アジアコンファレンス 2009.2.5); 「Советская церковная политика в причерноморских странах в 1944-1953 гг.」(冬期国際シンポ 3月5日)

帰国後の代表的業績: Шкаровский М. “Сталинская религиозная политика и Русская Православная Церковь в 1943-1953 годах,” *Acta Slavica Iaponica* 27 (2009), pp. 1-27.

氏 名 : ヴラディ・セルゲイ(Vradyi Sergey)

所 属 : ロシア科学アカデミー極東支部極東諸民族歴史学・考古学・民族学研究所准教授

滞 在 期 間 : 2008年6月～10月

研 究 テ ー マ : 明治維新前夜の日本における社会思想に19世紀の中国人学者が与えた影響／中国-日本-ロシア三国間関係の発展

滞 在 中 の 発 表 : 「19世紀における日中関係の社会、心理的ステレオタイプの進化:ロシアからの視点」(大学院講義 8月6日); 「19世紀前半明治維新前夜の日本在住中国人学者の著作について(ロシア語)」(センターセミナー 10月23日)

5. 国際交流

2009 年度

氏 名 : アバシン・セルゲイ (Abashin Sergey)

所 属 : ロシア科学アカデミー民族学・人類学研究所上級研究員

滞 在 期 間 : 2009 年 6 月～10 月

研 究 テ ー マ : ロシア・ソヴィエト統治下におけるウズベク人のコミュニティ「オショバ」

滞 在 中 の 発 表 : 「タシケントの弾圧犠牲者博物館: 帝国史・ソ連史のウズベクの説明(ロシア語)」(センターセミナー 9 月 29 日); 「エトノス[民族]に関するソヴィエト理論(ロシア語)」(大学院特別講義 10 月 8 日); 「Идеология мустакиллик и Музей памяти жертв репрессий в Ташкенте」(中央ユーラシア研究会特別講演会、東京大学 10 月 9 日); 「Российское завоевание Средней Азии: имперский и национальный взгляды」(ロシア史研究会大会、法政大学 10 月 10 日)

帰国後の代表的業績: Авашин С. “«Идеальный колхоз» в советской Средней Азии: история неудачи или успеха?,” *Acta Slavica Iaponica* 29 (2011), pp. 1-26; Sergei Abashin, “Empire and Demography in Turkestan: Numbers and the Politics of Counting,” in Uyama Tomohiko, ed., *Asiatic Russia: Imperial Power in Regional and International Contexts* (London: Routledge, 2011), pp. 129-149.

氏 名 : ダニレンコ・アンドリイ (Danylenko Andriy)

所 属 : ペース大学現代言語文化学部講師

滞 在 期 間 : 2009 年 6 月 1 日～8 月

研 究 テ ー マ : ロシア・オーストリア統治下のウクライナにおける聖書: 言語と言語政策

滞 在 中 の 発 表 : 「東スラブ語における「持つ」こと: be 型と have 型の間で」(特別講義 於東京大学 6 月 19 日); 「The Ukrainian Bible, the Polish Uprising, and Imperial Censorship in 1863」(センターセミナー 7 月 23 日)

帰国後の代表的業績: Andrii Danylenko, A Case Study of Linguistic Mentality in the Eighteenth-century Hetmanate,” *Harvard Ukrainian Studies* 29:1-4 (2007): in Michael S. Flier, ed., *Ukrainian Philology and Linguistics in the Twenty-first Century* (2011), pp. 225-256; Andrii Danylenko (Serhii Vakulenko と共編著), *Studien zu Sprache, Literatur und Kultur bei den Slaven. Gedenkschrift für George Y. Shevelov aus Anlass seines 100. Geburtstages und 10. Todestages*. (Die Welt der Slaven. Sammelbände, Sborniki, vol. 42)(München, Berlin: Otto Sagner, 2012), xlv+520 pp.;

氏 名 : ファインケ・マイケル (Finke Michael)

所 属 : イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校スラブ言語・文学部教授

滞 在 期 間 : 2009 年 12 月～2010 年 3 月

研 究 テ ー マ : 三人のチェーホフ(アントン・チェーホフとその兄弟)

滞 在 中 の 発 表 : 「Why Did Dr. Chekhov Ignore His TB?」(センターセミナー 2 月 17 日)

帰国後の代表的業績: Michael Finke, “Of Interpretation and Stolen Kisses: From Poetics to Metapoetics in

Chekhov's 'Potselui' (1887),” *Acta Slavica Iaponica* 29 (2011), pp. 27-47.

氏 名 : ジェンティス・アンドリュー (Gentes Andrew)
 所 属 : クイーンズランド大学歴史・哲学・宗教学・古典学部講師
 滞 在 期 間 : 2009年9月～2010年2月
 研 究 テ ー マ : サハリンの流刑植民地について
 滞 在 中 の 発 表 : 「Sakhalin as *Cause Celebre*: The Re-signification of Tsarist Russia's Penal Colony」(センターセミナー 1月20日)
 帰国後の代表的業績: Andrew Gentes, “Sakhalin as *Cause Celebre*: The Re-signification of Tsarist Russia's Penal Colony,” *Acta Slavica Iaponica* 32 (2012), pp. 55-72

氏 名 : コウォジェイチク・ダリウシュ (Kołodziejczyk Dariusz)
 所 属 : ワルシャワ大学歴史学部准教授
 滞 在 期 間 : 2009年6月～11月
 研 究 テ ー マ : 出会いと接触の場としての黒海北部
 滞 在 中 の 発 表 : 「Max Weber and the Crimean Tatars: What Can We Learn Today from the Experience of the Early Modern Steppe Diplomacy?」(GCOE-SRC セミナー 10月14日)
 帰国後の代表的業績: Dariusz Kołodziejczyk, “Divided Sovereignty in the Genghisid States as Exemplified by the Crimean Khanate: 'Oriental Despotism' à rebours?,” *Acta Slavica Iaponica* 32 (2012), pp. 1-21

氏 名 : クンダクバエヴァ・ジャナト (Kundakbayeva Zhanat)
 所 属 : アル・ファラビ名称カザフ国立大学歴史学部教授
 滞 在 期 間 : 2010年1月～3月
 研 究 テ ー マ : 現在の中の過去: 現代ロシアとカザフスタンの学問的ディスコースにおける帝国の記憶と表象
 滞 在 中 の 発 表 : 「Политика России в Северном Прикаспии в XVIII в.: пути интеграции кочевых народов в состав империи」(早稲田大学イスラーム地域機構研究特別講演会 2月20日); 「18世紀北カスピ地域におけるロシア帝国の政策: 伝統の創造と象徴権力(ロシア語)」(センターセミナー 3月11日)」

2010年度

氏 名 : アールト・パミ (Aalto Pami)
 所 属 : タンペレ大学ジャン・モネ EU 研究センター(フィンランド)教授
 滞 在 期 間 : 2010年6月～9月
 研 究 テ ー マ : 国内規模、国際規模、地球規模の次元から考えるロシアのエネルギー政策
 滞 在 中 の 発 表 : 「The Emerging New Energy Agenda and Russia: Implications for Russia's Main Markets in Europe」(新学術研究会 7月11日); 「Modelling Russia's Energy Policy in Europe and

5. 国際交流

the Far East: From Business to Energy Superpower and Environmental Frames」(於一橋大学経済研究所 9月15日)

帰国後の代表的業績: Pami Alto, “The Emerging New Energy Agenda and Russia: Implications for Russia’s Role as a Major Supplier to the European Union,” *Acta Slavica Iaponica* 30 (2011), pp. 1-20; Pami Aalto, ed., *Russia’s Energy Policy: National, Interregional and Global Dimensions* (Cheltenham, UK: Edward Elgar, 2012), 272 p.; Pami Alto (V. Harle, S. Moisisio と共編), *Global and Regional Problems: Towards an Interdisciplinary Study* (Farnham: Ashgate, 2012), 244 p.

氏 名 : フェン・ユジュン (Feng Yujun)

所 属 : 中国現代国際関係研究院(CICIR) 教授

滞 在 期 間 : 2010年11月～2011年3月

研 究 テ ー マ : BRICs 諸国のケーススタディ:新興諸国間における協力醸成メカニズムの実現可能性、方法、意味

滞 在 中 の 発 表 : 「国際ガス市場の変化と中露ガス協力」(「ロシアのエネルギーと環境問題の現状」研究会 2月26日); 「国際ガス市場の変化と中露ガス協力」(於環日本海経済研究所 3月3日); 「中ロエネルギー協力に関する研究会」(内閣府経済社会総合研究所国際共同研究報告会 3月3日); 「ラウンドテーブル《ユーラシアをめぐると日印対話》」(国際シンポジウム「ユーラシアをめぐると日印対話」 3月11日)

帰国後の代表的業績: 帰国後、「中国における現代ロシア研究の対象と方法」「露欧間のエネルギーをめぐるゲームにおける新変化」「ロシアとアジア太平洋地域:偉大な戦略と不透明な人物」「高速鉄道をめぐると中国・ウクライナ関係」などの論考を『現代国際関係』『人民時報』などの学術誌、メディアに多数発表した。

氏 名 : マリコヴァ・マリア (Malikova Maria)

所 属 : ロシア科学アカデミーロシア文学研究所(プーシキン館) 比較文学部上級研究員

滞 在 期 間 : 2010年10月～12月

研 究 テ ー マ : 歴史的移行期への人類学的アプローチ:ネップ期の大衆文学をテスト・ケースとして

滞 在 中 の 発 表 : 「亡命作家ナボコフの目から見た内戦と脱出(ロシア語)」(科研研究会「亡命と芸術:異境のロシア文化」 11月19日); マリコヴァ准教授は亡命作家ヴラジーミル・ナボコフの研究者でもあるため、国内のナボコフ研究者のサークルとも密に付き合い、研究報告会などの場に参加した。ソウル国立大学とのジョイントシンポジウムでも、コメンテータの役割をつとめ、交流に貢献した。

帰国後の代表的業績: Маликова М. “Издание переводной беллетристики в Советской России 1920-х годов по материалам внутренних издательских рецензий (из архива ленинградского кооперативного издательства «Время»),” *Acta Slavica Iaponica* 32 (2012), pp. 23-54.

氏 名 : モリソン・アレクサンダー (Morrison Alexander)
 所 属 : リヴァプール大学歴史学部講師
 滞 在 期 間 : 2010年6月～10月
 研 究 テ ー マ : ロシアの公職者の思考様式から見る中央アジア征服
 滞 在 中 の 発 表 : 「Twin Imperial Disasters: The Invasions of Khiva and Afghanistan in the Russian and British Official Mind, 1839-41」(新学術研究会 7月10日); 「Metropole, Colony and Imperial Citizenship in the Russian Empire」(大学院特別講義 7月22日); 「“This Particularly Painful Place”: The Failure of the Syr-Darya Line as a Frontier, 1845-1865」(中央ユーラシア研究会特別講演会、東京大学本郷キャンパス 10月2日); 「An Exercise in Futility? Some Reflections on Senator Count K. K. Pahlen’s Commission of Inspection in Turkestan, 1906-1911」(「文書史料による近代中央アジアのイスラーム社会史研究」研究会、京都外国語大学、2010年10月3日)

帰国後の代表的業績: Alexander Morrison, “‘Sowing the Seed of National Strife in This Alien Region’: The Pahlen Report and *Pereselenie* in Turkestan, 1908-1910,” *Acta Slavica Iaponica* 31 (2012), pp. 1-29; Alexander Morrison, “Sufism, Pan-Islamism and Information Panic: Nil Sergeevich Lykoshin and the Aftermath of the Andijan Uprising,” *Past & Present*, 214:1 (2012), pp. 255-304; Alexander Morrison, “Metropole, Colony, and Imperial Citizenship in the Russian Empire,” *Kritika: Explorations in Russian and Eurasian History* 13:2 (2012), pp. 327-364; Alexander Morrison, “How ‘Modern’ Was Russian Imperialism?” in Uyama Tomohiko, ed., *Empire and After: Essays in Comparative Imperial and Decolonization Studies* (Sapporo: Slavic Research Center, 2012), pp. 1-17; Alexander Morrison, “Twin Imperial Disasters: The Invasions of Khiva and Afghanistan in the Russian and British Official Mind, 1839-1842,” *Modern Asian Studies* (2013), pp. 1-48; Alexander Morrison, “The Pahlen Commission and the Restoration of Rectitude in Colonial Transcaspia, 1908-1909,” in E. Sibeud, H. Blais, and C. Freidj, eds., *Enquêter dans les sociétés coloniales*, monograph issue of *Monde(s). Histoire, Espaces, Relations*, forthcoming.

氏 名 : ポポヴィチ・リュドミラ (Popović Ljudmila)
 所 属 : ベオグラード大学言語学部スラブ部門教授
 滞 在 期 間 : 2010年6月～9月
 研 究 テ ー マ : 日本におけるウクライナ研究: 現代日本文化のなかのウクライナ・イメージ
 滞 在 中 の 発 表 : 「動作様態 (Aktionsart) の記述の認知言語学的モデル (ロシア語)」(講演会、於東京大学 6月25日); 「Семантика светообозначений в русском, украинском и сербском фольклоре」(日本ロシア文学会北海道支部研究会 6月27日); 「Формирование и развитие украинского языка」(センターセミナー 7月17日); 「Ruthenians versus Ukrainians in Serbia and How They Are Interwoven」(研究会「多言語社会ヴォイヴォディナ: 交錯する境界・文化・アイデンティティ1」 9月27日)

帰国後の代表的業績: Поповић Љ. Категорија евиденцијалности у српском и украјинском језику // Зборник Матице српске за славистику. 2010. № 77. С. 17-47; Поповић Љ. Русини и

5. 国際交流

Украјинци у Србији // Зборник Матице српске за славистику. 2010. № 78. С.69-100;
Поповић Л. Таксисне значења деепричастия в србском језику // Јужнословенски
филолог. LXVII. 2011. С. 135-162; *Поповић Љ.* Контрастивна граматика украјинског
и српског језика: таксис и евиденцијалност. Београд: САНУ, Одељење језика и
књижевности, Српски језик у поређењу са другим језицима, Књига 3, 2013. 445 С.

氏 名 : ランセル・デイビッド (Ransel David)

所 属 : インディアナ大学歴史学部教授

滞 在 期 間 : 2011年1月～3月

研 究 テ ー マ : 後期ソヴィエト～ポストソヴィエト期の市民のアイデンティティ

滞 在 中 の 発 表 : 「What Is Public, What Is Private: Sale of National and Natural Heritage Sites to Private
Developers in Contemporary Russia」(センターセミナー 2月24日)

帰国後の代表的業績: David Ransel, “Implicit Questions in Michael Confino’s Essay: Corporate State and
Vertical Relationships,” *Cahiers du monde russe* 51:2 (2011), pp. 195-210; David Ransel,
“Interviewing Village Mothers: With Help from Friends,” in Choi Chatterjee and Beth
Holmgren, eds., *The Russian Experience: Americans Encountering the Enigma* (Routledge,
forthcoming); David Ransel, “‘They Are Taking That Air From Us’: Sale of Commonly
Enjoyed Properties to Private Developers,” in David L. Ransel, Choi Chatterjee, Karen
Petroni, Mary Cavender, eds., *Everyday Life in Russia Past and Present* (forthcoming);
David Ransel, “The Scholarship of Everyday Life,” in *Everyday Life in Russia*
(forthcoming).

氏 名 : ヴィソコフ・ミハイル (Vysokov Mikhail)

所 属 : サハリン国立大学ロシア史学部教授

滞 在 期 間 : 2010年10月～2011年3月

研 究 テ ー マ : ペレストロイカおよびポスト・ソヴィエト期のロシア極東史をめぐるヒストリオグラフィー

滞 在 中 の 発 表 : 「Российская историография сахалинских эпизодов русско-японской войны
1904-1905 годов」(国際シンポ「ロシアと日本の研究者の目からみる日露戦争サハリン戦」
10月9日); 「Советская историография истории Северного Сахалина в период
японской оккупации (1920-1925 гг.)」(サハリン研究会 10月18日); 「Японская
интервенция в Сибири и ее значение для российско-японских отношений:
Историографический аспект」(極東研究会 1月14日); 「Проблемы комментирования
книги Антона Чехова “Остров Сахалин”」(センターセミナー 1月17日)

帰国後の代表的業績: *Высоков М.* (Василевский А.А.と共著) Сахалин и Курильские острова: История с
древнейших времен до образования Сахалинской области. Южно-Сахалинск:
Издательство «Рубеж», 2012. 320 с.; *Высоков М.* (Карпенко С.А., Фролова Н.И.と共
著) Сахалин и Курильские острова: время больших перемен. Южно-Сахалинск:
Издательство «Рубеж», 2012. 240 с.; *Высоков М.* Проблемы комментирования книги
Антон Чехова «Остров Сахалин» // На периферии и на чужбине: сравнительное

исследование маргиналий русской культуры. Сборник статей № 2. Саппоро, 2011. С.115-136; *Высоков М.* Сахалин и Курильские острова: Хроники XX столетия. 1991-1995 годы (日本語訳) // Региональные исследования муниципального университета Кусиро. № 23. 2011. С.113-134; *Высоков М.* (Лисицына Е.Н.と共著) Принудительный труд в нефтяной промышленности Сахалина во второй половине 40-х – начале 50-х гг. XX в. // Вестник Тихоокеанского государственного университета. 2011. № 4(23). С. 279-287; *Высоков М.* История зарождения и развития электросвязи в Российской империи: Источниковедческий аспект // Вестник архивиста. Москва, 2012. № 3. С. 51-64.

2011年度

氏 名 : アスタフィエヴァ・エレナ (Astafieva Elena)

所 属 : 高等研究実習院(パリ)講師

滞 在 期 間 : 2011年6月～10月

研 究 テ ー マ : パレスチナ-シリアにおけるロシアのプレゼンス: 政治、宗教、文化の諸相から (1772-1905年)

滞 在 中 の 発 表 : 「The Russian Presence in Palestine: Political, Religious, and Cultural Aspects (1847-1917)(ロシア語)」(センターセミナー 7月20日); 「The Formation of the Russian Orthodox Discourse on Catholicism in Imperial Russia」(「ロシア帝国支配地域における民族知識人形成と大学網の発展に関する研究」科研研究会 8月6日); 「ロシアのイエズス会神話を作った男?、ユーリー・サマーリン(ロシア語)」(センターセミナー 10月19日); 「The Presence of Russia in Palestine: On the Context of Diplomacy and Domestic Politics of the Russian Empire, Late 19th - Early 20th Centuries」(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・基幹研究「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」公開講演会 10月21日)

氏 名 : カムセラ・トマシュ (Kamusella Tomasz)

所 属 : オポレ大学東スラヴ言語学研究所(ポーランド)准教授

滞 在 期 間 : 2011年6月～8月

研 究 テ ー マ : スラブ諸語の3分類: 言語学的結論か、政治的産物か、あるいは偶然か

滞 在 中 の 発 表 : 「Language and Borders in the Balkans」(第2回GCOEサマースクール 8月3日); 「The Cultural and Social History of the Silesian Language」(プロジェクト Language and Society in Modern and Contemporary European History、青山学院大学 7月8日); 「Language and Nationalism in the History of Modern Central Europe」(同プロジェクト Language and Society in Modern and Contemporary European History 7月9日)

帰国後の代表的業績: Tomasz Kamusella, “The Change of the Name of the Russian Language in Russian from Rossiiskii to Russkii: Did Politics Have Anything to Do with It?” *Acta Slavica Iaponica* 32 (2012), pp. 73-96; Tomasz Kamusella and A. Rocznio, “Sztandaryzacyjo ślōnski godki/Standaryzacja języka śląskiego,” in I. V. Abisigomian, ed., *Lingvokul'turnoe*

5. 国際交流

prostranstvo sovremennoi Evropy cherez prizmu malykh i bolshikh iazykov. K 70-letiiu professora Aleksandra Dimitrievicha Dulichenko [Ser: Slavica Tartuensis, Vol. 9](Tartu: Tartu University, 2011), pp. 288-294; Tomasz Kamusella, “Review of Snježana Kordić, Jezik i nacionalizam,” *Eurasia Border Review* 1 (2010), pp 127-132; Kamusella Tomasz, Nomachi Motoki, eds., *Borders of Identity and Language in Modern Central Europe: The Slavic World* (Basingstoke: Palgrave, forthcoming); Kamusella Tomasz, Nomachi Motoki, eds., [Dual volume] *Language Politics in Vojvodina, The Atlas of Language Politics in Modern Central Europe: The Concept and Its Perspectives* (Sapporo: Slavic Research Center forthcoming).

氏 名 : クジオ・タラス(Kuzio Taras)

所 属 : トロント大学ウクライナ研究講座上級研究員

滞 在 期 間 : 2011年11月～2012年3月

研 究 テ ー マ : ウクライナ現代史

滞 在 中 の 発 表 : 「20歳のウクライナ:ポスト・ソヴィエトかネオ・ソヴィエトか?(英語)」(新学術冬期国際シンポ 1月18日)

帰国後(滞在中)の代表的業績: Taras Kuzio, “The U.S. Support for Ukraine’s Liberation during the Cold War: A Study of Prolog Research and Publishing Corporation,” *Communist and Post-Communist Studies* 45:1 (March 2012), pp. 1-14; Taras Kuzio, “Ukraine’s Relations with the West since the Orange Revolution,” *European Security* 21:1 (March 2012), pp. 1-19; Taras Kuzio, “Russianization of Ukrainian National Security Policy under Viktor Yanukovych,” *Journal of Slavic Military Studies* 25 (2012), pp. 558-581; Taras Kuzio, “Ukraine, Russia and Georgia: Chameleon Politicians and Arms Exports,” *Eurasia Daily Monitor* 9:76 (April 17, 2012); Taras Kuzio, “Leonid Kuchma Tells It Like It Is,” *Jamestown Foundation blog* (April 20, 2012); Taras Kuzio, “Ukraine’s (Russian) Defense Minister and Selective Justice,” *Jamestown Foundation blog*, 16 April 2012; Taras Kuzio, “The Problem in Ukraine Isn’t Svoboda, It’s Yanukovych: A Reply to Ivan Katchanovski,” *Open Democracy* (April 12, 2012); Taras Kuzio, “Competing National Identities and Democratization in Ukraine: The Fifth and Sixth Cycles in Post-Soviet Ukrainian History,” *Acta Slavica Iaponica* 33 (2013), pp. 27-46; 滞在中に単著原稿 *Ukraine. A Contemporary History* を脱稿、The University of Toronto Press.から刊行予定

氏 名 : レヴィントン・ゲオルギー(Levinton Georgij)

所 属 : ヨーロッパ大学人類学部(サンクトペテルブルグ)教授

滞 在 期 間 : 2011年6月～10月

研 究 テ ー マ : マンデリシュタムとドストエフスキー:スラブ主義、土壌主義、反ユダヤ主義

滞 在 中 の 発 表 : 「О мифологизме в литературе」(日本ロシア文学会北海道支部研究会 7月2日); 「マ

ンデリシュタームとドストエフスキー(ロシア語)」「(センターセミナー 10月6日);「マンデリシュタームとドストエフスキー:マンデリシュターム作品におけるドストエフスキーのサブテキストと主題(ロシア語)」「(東京大文学研究科特別講義 10月21日)

帰国後(滞在中)の代表的業績: *Левинтон Г.А., Гардзонио, Н. Н. Казанский* (отв. ред.) LAUREA LORAE: Сборник памяти Ларисы Георгиевны Степановой. СПб.: Нестор-История, 2011. 727 с.; *Левинтон Г.А., Н.Г. Охотинский*. Б.В. Томашевский в журнале «Гермес» (1923): публикация пушкинских черновиков из «Майковского собрания» // Пушкинские чтения в Тарту. 5. Пушкинская эпоха и русский литературный канон. К 85-летию Л.И. Вольперт. Ч. 2. Тарту, 2011. С. 527 - 553; *Левинтон Г.А.* Из комментариев к прозе Мандельштама. 8 // *Donum homini universalis*. Сб. статей в честь 70-летия Н.В. Котрелёва. М.: ОГИ, 2011. С. 162-167.

氏 名 : シャフナザリヤン・ノナ(Shakhnazaryan Nona)

所 属 : クバン社会経済大学歴史学・哲学・社会学部准教授

滞 在 期 間 : 2011年9月～2012年3月

研 究 テ ー マ : しぶとく残る古い慣習:3つのポスト社会主義社会における縁故主義、情実、腐敗

滞 在 中 の 発 表 : 「アルメニア・ディアスポラを通して見た『ソヴィエト人』:表象、ステレオタイプ、イメージ(英語)」「(新学術冬期国際シンポ 1月18日);「警察改革:非公式の慣行と反汚職対策(グルジア、アルメニア、ナゴルノ・カラバフの比較)(ロシア語)」「(センターセミナー 3月12日); A Comparative Study of Informal Economy and Anti/Corruption in South Caucasus: the Case of Police Reform(京都大学のマクロ経済学・経済システム研究会、比較経済体制研究会共催の研究会 3月16日)

帰国後(滞在中)の代表的業績: Nona Shakhnazaryan, “Police Reform and Corruption in Georgia, Armenia, and Nagorno-Karabakh,” *PONARS Eurasia Policy Memo*, No. 232 (September 2012).

氏 名 : シンキン・ヴラジミル(Shishkin Vladimir)

所 属 : ロシア科学アカデミーシベリア支部歴史学研究所社会・政治発展史部門長

滞 在 期 間 : 2011年11月～2012年3月

研 究 テ ー マ : 大戦、革命期(1917-1922)のシベリアと極東におけるロシアの国家体制

滞 在 中 の 発 表 : 「ロシア帝国の再起動、1917-1922年:近代化の要因としての戦争と革命(ロシア語)」「(新学術冬期国際シンポ 1月18日)

帰国後(滞在中)の代表的業績: *Шишкин В.* Общественная и государственная деятельность А.М. Окурокова (1917 – конец 1920-х годов) // Вестник НГУ. Серия: История, филология. Новосибирск, 2012. Т. 11. Вып. 1. С. 65-77; *Шишкин В.* Особый отдел управления делами Верховного правителя и Совета министров Российского правительства (май – декабрь 1919 г.) // Вестник НГУ. Серия: История, филология. Новосибирск, 2012. Т. 11. Вып. 8. С. 63-81 (объем – 1,9 п. л.); *Шишкин В.* Создание Совета Верховного правителя А.В. Колчака (20-21 ноября 1918 г.) // Гуманитарные науки в Сибири. Новосибирск, 2012. № 3. С. 96-99; *Шишкин В.* Кольцовская трагедия: из истории

5. 国際交流

репрессий и реабилитации эстонского населения Сибири (1937-1959 гг.) // Власть и общество в Сибири в XX веке). Новосибирск, 2012. Вып.3. С.164-181.

2012 年度

氏 名 : ブリュムバウム・アルカージ(Blyumbaum Arkady)
所 属 : ロシア科学アカデミーロシア芸術史研究所上級研究員
滞 在 期 間 : 2012 年 11 月～2013 年 3 月
研 究 テ ー マ : アレクサンドル・ブローク:文学と政治(1905-1921)
滞 在 中 の 発 表 : 「Священная брань: к интерпретации поэмы А. Блока «Возмездие»」(センターセミナー 1 月 11 日);「歌う海、歌う風:アレクサンドル・ブロークの創作における共通前提と政治(ロシア語)」(東京大文学研究科特別講義 2 月 22 日)

氏 名 : パン・ドンメイ(Pang Dongmei)
所 属 : 黒龍江大学ロシア研究所准教授
滞 在 期 間 : 2012 年 11 月～2013 年 3 月
研 究 テ ー マ : ロシア極東地域における中国人による犯罪への対処
滞 在 中 の 発 表 : 「ロシアにおける組織犯罪の問題とそれとの闘い(ロシア語)」(中国人研究者によるロシア極東の分析セミナー 1 月 24 日);「中露国境をめぐる犯罪」(CFES-SRC 共同セミナー「乗り越えるべき中ロ国境地域の争点」 3 月 26 日)

氏 名 : ラウンド・ジョン(Round John)
所 属 : バーミンガム大学地理・地球・環境学部上級講師
滞 在 期 間 : 2012 年 6 月～10 月
研 究 テ ー マ : 先の見えない生活に対応する:現代ロシアにおける日常生活
滞 在 中 の 発 表 : 「Coping with Uncertainty: Everyday Life in Moscow and Kazan」(センターセミナー 8 月 20 日);「The Impacts of Economic Reform on Everyday Life in Russia」(富山大学極東地域研究センターInternational Autumn Program for Young Scholars and Students in 2012 10 月 16 日)

氏 名 : リヤザンツェフ・セルゲイ(Ryazantsev Sergey)
所 属 : ロシア科学アカデミー社会政治研究所教授
滞 在 期 間 : 2012 年 6 月～10 月
研 究 テ ー マ : 民族移住と国境隣接地域におけるディアスポラの形成:ロシアの国家安全保障を考えるうえで
滞 在 中 の 発 表 : 「Migration and Migratory Policy of Russia in Modern Demographic Conditions: Problems and Optimization Ways」(センターセミナー 7 月 14 日);「Migration and Its Regulation in Russia」(富山大学極東地域研究センターInternational Autumn Program for Young Scholars and Students in 2012 10 月 17 日)

帰国後(滞在中)の代表的業績: *Рязанцев С.* России нужна новая миграционная политика // Международные процессы. Том 10. Номер 1 (28). 2012; *Рязанцев С., Зоидов К.* Демографическое будущее России // Международные процессы. Том 11. Номер 1 (32). 2013.

氏 名 : ウィークス・セオドア(Weeks Theodore)

所 属 : 南イリノイ大学歴史学部教授

滞 在 期 間 : 2012年6月～10月

研 究 テ ー マ : Vilna, Wilno, Vilnius: 多文化都市の歴史(1795-2000)

滞 在 中 の 発 表 : 「City, Cultures, Empire: Vilnius in the Russian Empire and SSSR」(新学術夏期国際シンポ 7月4日); 「Vilnius under Soviet Rule: Nationality, Socialism, and Everyday Life」(ロシア史研究会大会 10月6日)

氏 名 : ジダノフ・ヴァジム(Zhdanov Vadim)

所 属 : フリードリヒ・アレクサンダー大学エアランゲン＝ニュルンベルク宗教・布教学講座助教授

滞 在 期 間 : 2012年11月～2013年3月

研 究 テ ー マ : プーチン時代のロシアにおける「宗教」の語られ方: 現代ロシアの映画とテレビ番組の中の「宗教的」という言葉に込められた社会構造

滞 在 中 の 発 表 : 「ロシア正教会と国家との協力強化: 教会の成功、社会の反応(ロシア語)」(センターセミナー 2月18日); 「Religious Education in Russian Public Schools: Social and Legal Aspects」(筑波 3月)

帰国後(滞在中)の代表的業績: Vadim Zhdanov, “Manufacturing Religious Pluralism: Politics of Religion and Media Discourse in Contemporary Russia,” *India, Russia, China: Comparative Studies on Eurasian Culture and Society* [Comparative Studies on Regional Powers No. 11] (Sapporo, 2012), pp. 1-10; *Жданов В.* Герменевтика религии и современное религиоведение: подходы к религиоведческой герменевтике культуры // *Свеча-2013: Религия, religio и религиозность в региональном и глобальном измерении* (Т.24). Владимир: Изд-во Владим. гос. ун-та, 2013.

5. 国際交流

(2) 外国人研究員（中期）

（21世紀COE外国人研究員、日本学術振興会、国際交流基金ほか）

センターには外国人特任教員プログラム以外の外国人の研究者も毎年数名程度滞在する。以下に列挙するのは、そのうち3ヵ月以上滞在した研究者である。肩書はさまざまで、2007年度までは21世紀COE外国人研究員が多数を占めた。その他は日本学術振興会、国際交流基金など日本側の奨学金を得て滞在する研究者、また本国の奨学金制度や自費で滞在する研究者などである。彼らは3階のプロジェクトスペースに専用の机を与えられ、希望すればパソコンが貸与される。大学内の宿舎に余裕がある場合はそこに居住するが、市内のマンスリーマンションなど家具付きの部屋を借りることも多い。研究者には、研究発表をしたり、センターの教員・大学院生との共同研究に参加するなど、さまざまな交流の機会がある。

2006年度

氏名：カシヤノフ・ゲオルギー (Kasianov Georgiy)
所属：ウクライナ科学アカデミーウクライナ史研究所現代史(ウクライナ)・政治部門長
滞 在 期 間：2006年6月～2006年8月(21世紀COE外国人研究員)
研 究 テ ー マ：独立ウクライナにおける歴史政策

氏名：ペイルーズ・セバスチャン (Peyrouse Sebastian)
所属：東洋言語文明学院ポスト・ソヴィエト諸国センター(フランス)・研究員
滞 在 期 間：2006年7月～2006年9月(21世紀COE外国人研究員)
研 究 テ ー マ：ポスト・ソヴィエト期中央アジアにおける宗教管理:ソヴィエト期の概念的フレームワークの継続

滞 在 中 の 発 表：State, Religion and the Secularism Issue in Post-Soviet Central Asia: The Soviet Legacy (京都大学地域研究統合情報センター・SRC・プロジェクト合同研究会、札幌:2006年7月9日); Managing Religion in Central Asia: The Continuity of the Soviet Conceptual Framework (中央ユーラシア研究会、東京:2006年9月16日)

帰国後の代表的業績：“The Relationship between Church and State in the Post-Soviet World. The Case of Christianity in Central Asia,” *Journal of Church and State* 49, Winter (2007): 97-115; “Nationhood and the Minority Question in Central Asia. The Russians in Kazakhstan,” *Europe-Asia Studies* 59, No. 3 (2007): 481-501; “Islam in Central Asia: National Specificities and Post-Soviet Globalization,” *Religion, State and Society* 35, No. 3 (2007): 245-260; “Christian Movements in Central Asia: Managing a Religious Minority in Soviet Times,” *Acta Slavica Iaponica* 25 (2008): 135-161; “The ‘Imperial Minority’: An Interpretative Framework of the Russians in Kazakhstan in the 1990s,” *Nationalities Papers* 36, No. 1 (2008): 105-123; “The Partnership between Islam and Orthodox Christianity in Central Asia,” *Religion, State and Society* 36, No. 4 (2008): 393-405; *Turkmenistan. Strategies of Power, Dilemmas of Development* (M.E. Sharpe, 2011); (Marlene Laruelle と共編) *Mapping Central Asia: Indian Perceptions and Strategies*

(Ashgate, 2011, 248 p.); (Marlene Laruelle と共著) *The 'Chinese Question' in Central Asia. Domestic Order, Social Changes and the Chinese Factor* (Hurst and Columbia UP, 2012); (Marlene Laruelle と共著) *Globalizing Central Asia. Geopolitics and the Challenges of Economic Development* (M.E. Sharpe, 2013).

氏 名 : フリツァーク・ヤロスラヴ (Hrytsak Yaroslav)
 所 属 : リヴィウ国立大学歴史研究所(ウクライナ)・所長
 滞 在 期 間 : 2006年10月～2006年12月 (21世紀COE外国人研究員)
 研 究 テ ー マ : ポスト・ソヴィエト・ウクライナにおけるリージョナリズムとナショナリズム
 滞 在 中 の 発 表 : A Tale of the Two Cities: Lviv and Donetsk in the Post-Soviet Ukraine (SRC-COE セミナー:2006年12月8日)

氏 名 : エキェルト・グジェゴシュ (Ekiert Grzegorz)
 所 属 : ハーヴァード大学政治学部(米国)・教授
 滞 在 期 間 : 2007年1月～2007年5月 (21世紀COE外国人研究員)
 研 究 テ ー マ : EU 拡大後の中・東欧における民主主義的統合と経済改革
 滞 在 中 の 発 表 : The Role of Civil Society in Democratic Transition and Consolidation: Lessons from Eastern and Central Europe (SRC-COE セミナー:2007年3月20日)

氏 名 : キム・トクジュ (Kim Dok-Ju)
 所 属 : 韓国外交通商部外交安保研究院(韓国)・准教授
 滞 在 期 間 : 2007年1月～2007年7月
 研 究 テ ー マ : ユーラシア・東アジアの地域協力問題
 滞 在 中 の 発 表 : Korea-Russia Relations: Yesterday, Today and Tomorrow (SRC セミナー:2007年7月2日)

2007年度

氏 名 : モングーシュ・マリーナ (Mongush Marina)
 所 属 : トゥバ人文学研究所(ロシア)・主任研究員
 滞 在 期 間 : 2007年5月～2007年9月 (21世紀COE外国人研究員)
 研 究 テ ー マ : 現代におけるトゥバ民族のアイデンティティー
 滞 在 中 の 発 表 : Конфессиональная ситуация в постсоветской Туве (SRC-COE 特別セミナー:2007年7月23日)

帰国後の代表的業績: *Один народ: три судьбы: Тувинцы России, Монголии и Китая в сравнительном контексте* (国立民族学博物館, 2010, 358 p.); *Тува век спустя после Каррутерса и Менхен-Хельфена* (国立民族学博物館, 2010, 212 p.)

5. 国際交流

氏 名 : カッツ・マーク ノーマン (Katz Mark Norman)
所 属 : ジョージ・メイソン大学公共国際学部(米国)・教授
滞 在 期 間 : 2007年6月～2007年7月(21世紀COE外国人研究員)
研 究 テ ー マ : 上海協力機構に対するプーチンの政策

氏 名 : スモラク・マレク アダム (Smolak Marek Adam)
所 属 : アダム・ミツケーヴィチ大学法学部(ポーランド)・教授
滞 在 期 間 : 2007年7月～2007年9月(21世紀COE外国人研究員)
研 究 テ ー マ : ポスト共産主義諸国における法的・政治的改革に対する EU および NATO の影響

氏 名 : ツィレンピロフ・ニコライ (Tsyrempilov Nikolay)
所 属 : ロシア科学アカデミーシベリア支部モンゴルチベット仏教研究所(ロシア)・研究員
滞 在 期 間 : 2007年11月～2008年2月 (21世紀COE外国人研究員)
研 究 テ ー マ : 仏教と帝政ロシア・ソ連・現代ロシア:相互関係と紛争の歴史
滞 在 中 の 発 表 : Open and Secret Diplomacy of the Tsarist and Soviet Russia in Tibet and the Role of Agvan Dorzhiev (1912–1925) (SRC 冬期シンポジウム:2007年12月)
帰国後の代表的業績: За святую Дхарму и Белого царя: российская империя глазами бурятских буддистов XVII–XVIII веков // *Ab Imperio*. 2009. № 2. С. 105–130; “The Open and Secret Diplomacy of Tsarist and Soviet Russia in Tibet: The Role of Agvan Dorzhiev (1912–1925),” in Uyama Tomohiko, ed., *Asiatic Russia: Imperial Power in Regional and International Contexts* (London: Routledge, 2011), pp. 216–233; *Буддизм и Империя. Бурятская буддийская община в России (XVIII – нач. XX в.)* Улан-Удэ: Институт монголоведения, буддологии и тибетологии СО РАН, 2013. 335 с.

2008年度

氏 名 : ラングシマポーン・パラドゥーン (Rangsimaporn Paradorn)
所 属 : タイ王国外務省アメリカ・南太平洋部(タイ)・二等書記官
滞 在 期 間 : 2008年3月～2008年7月
研 究 テ ー マ : 東アジア地域の安全保障に関するロシアの認識と対処(1996-2003)
滞 在 中 の 発 表 : Russia as an Aspiring Great Power in East Asia: Perceptions and Policies from Yeltsin to Putin(2008年7月1日)

2009年度

氏 名 : ヤン・チェン (Yang Cheng)
所 属 : 華東師範大学ロシア研究所(中国)・副所長(准教授)
滞 在 期 間 : 2009年10月～2010年7月
研 究 テ ー マ : Russian and Great-power Relations, Civilization Model and Diplomatic Behavior
滞 在 中 の 発 表 : From Discreteness to Convergence: Regime Similarity as a Background of the Sino-Russian Strategic Cooperation(2009年12月15日)

氏 名 : パク・ヒュンソ (Park Hyun-Seop)
 所 属 : 韓国ソウル大学人文学部 (韓国)・教授
 滞 在 期 間 : 2009 年 9 月～2010 年 9 月
 研 究 テ ー マ : エイゼンシュテインの映画理論: 認知論的アプローチ

氏 名 : ペナティ・ベアトリーチェ (Penati Beatrice)
 所 属 : 日本学術振興会・外国人特別研究員 (イタリア)
 滞 在 期 間 : 2009 年 10 月～2011 年 10 月
 研 究 テ ー マ : ウズベキスタンにおける土地水利改革: 集団化以前の農村社会のソヴィエト化
 滞 在 中 の 発 表 : 「プロメテウス戦線」におけるロシア・ムスリム亡命者: ヨーロッパからの見方 (1919～1939 年) (SRC セミナー: 2010 年 1 月 7 日); Land-tax and cotton in the Turkestan krai (ca. 1870-1916) (中央ユーラシア研究会、東京: 2010 年 10 月 2 日); On the context of Pahlen's report: some debates about land settlement and forestry (1905-1914) (「文書史料による近代中央アジアのイスラーム社会史研究」研究会、京都、2010 年 10 月 3 日); Of rivers and men: towards a bottom-up approach to border issues in early Soviet Central Asia? (GCOE サマースクール: 2011 年 8 月 2 日); "Swamps, sorghum and saksauls: marginal lands and the fate of Russian Turkestan," *Central Asian Survey* 29(1), 2010, pp. 61-78; "Notes on the birth of land-tax in Russian Turkestan. A view from the Fergana oblast", 1876-1882," *Journal of Economic and Social History of the Orient* 53(5), 2010, pp. 739-769.

帰国後の代表的業績: "Beyond technicalities: on land assessment and land-tax in Russian Turkestan, 1886-1915," *Jahrbücher für Geschichte Osteuropas* 59(1), 2011, pp. 1-27; "Le Comité du Coton et les autres. Secteur cotonnier et pouvoir économique en Ouzbékistan, 1922-1927," *Cahiers du Monde Russe* 52(4), 2011, pp. 555-589; "Adapting Russian Technologies of Power: on administrative documents for the history of the land-and-water reform in the Uzbek SSR (1924-1929)," *Revolutionary Russia* 25(1), 2012, pp. 187-217; "On the Soviet discovery of rural Central Asia: the Karp commission in context," in E. Sibeud, H. Blais, C. Freidj, eds., *Enquêter dans les sociétés coloniales*, monograph issue of *Monde(s). Histoire, Espaces, Relations*, no.4, 2013, pp. 105-125.

2010 年度

氏 名 : リチャードソン・ポール (Richardson Paul)
 所 属 : バーミンガム大学地理学部 (イギリス)・博士課程
 滞 在 期 間 : 2010 年 4 月～2011 年 3 月 (2011 年度: 学振特別研究員として滞在)
 研 究 テ ー マ : 日ロ領土問題に関する露西亜国内の言説分析

氏 名 : モスカリョフ・ドミトリー (Moskalev Dmitrii)
 所 属 : ウクライナ国立科学アカデミー付属東洋研究所 (ウクライナ)
 滞 在 期 間 : 2010 年 6 月～2011 年 7 月

5. 国際交流

研究テーマ：現代日本語におけるモダリティの文末の複合述語表現(ウクライナ語との対照研究)

氏名：ハーン・シャムシャド(Khan Shamshad)

所属：インド防衛問題研究所(IDSA) (インド)・研究員

滞在期間：2010年12月～2011年3月

研究テーマ：Indo-Japan Strategic Relations: India's Search for Reciprocity

滞在中の発表：インドと日本の戦略関係:問題点と期待点、そして将来の課題 (新学術領域研究会:
2011年2月14日)

2011年度

氏名：グチノヴァ・エルザバイル(Guchinova Elza-Bair)

所属：ロシア科学アカデミー民族学・人類学研究所(ロシア)

滞在期間：2011年6月15日～2012年4月14日

研究テーマ：日本人抑留者の視覚的記憶

滞在中の発表：日本人捕虜の絵画における外傷(トラウマ)の言語(スラブ研究センターセミナー:4月10
日)

氏名：リチャードソン・ポール(Richardson Paul)

所属：バーミンガム大学地理学部(イギリス)・博士課程

滞在期間：2011年7月22日～2012年7月20日

研究テーマ：北方領土の言説を越えて:日本の中央・地方間政治とナショナルアイデンティティ

滞在中の発表：Beijing is a Friend to Us, But Tokyo is Dearer: The Destiny of the Southern Kurils and
Eurasian Geopolitics(2011年8月27日)

氏名：ムヒナ・サルダーナ(Mukhina Sardaana)

所属：在ロシア日本大使館(ロシア)・現地職員(秘書)

滞在期間：2011年11月1日～2012年10月30日

研究テーマ：経済とエネルギーの分野における日ロ関係

滞在中の発表：ロシア経済におけるエネルギーの役割とロシアと日本の関係(GCOE-SRC 研究員セミナー:
2月22日)

2012年度

氏名：コラド・シャリル(Corrado Sharyl)

所属：ペパーダイン大学(米国)・助教授

滞在期間：2012年5月28日～2012年12月31日

研究テーマ：『地の果て』:サハリン島とロシアの帝国イメージ

滞在中の発表：Imperialist Domination or Internal Colonization? G.I. Nevel'skoi and Russian
Acquisition of the Amur River Basin, 1849-1860 (スラブ研究センターセミナー:12月25

日)

氏 名 : ツァチェフスキ・ベネリン (Tsachevsky Venelin)
所 属 : 現代政治研究センター(ブルガリア)・政治学者
滞 在 期 間 : 2012年5月25日～2012年11月24日
研 究 テ ー マ : 東南ヨーロッパに対する日本の政策と21世紀初期におけるその地域と日本の関係について
滞 在 中 の 発 表 : Energy Management Policies in Southeastern Europe (スラブ研究センターセミナー : 11月13日)

氏 名 : シレジンスカ-アダムチャク・アンナ (Sledzinska-Adamczak Anna)
所 属 : アダム・ミツケーヴィチ大学(ポーランド)・研究員
滞 在 期 間 : 2012年9月3日～2013年2月28日
研 究 テ ー マ : アジア・太平洋地域の国際関係を背景とした日露関係

5. 国際交流

(3) 外国人招聘（短期）

以下には、短期で招聘した外国人数について、財源別、招聘地域別に示した。短期の招聘外国人は、(1)と(2)で示した長期、中期の外国人研究員を除く者で、国際会議(シンポジウム)などに招聘した外国人を含んでいる。これらの表からは、財源としては、21世紀COE、新学術領域研究、グローバルCOEの3つの大型プロジェクトが大きな役割を果たしていることが分かる。招聘地域を見ると、2007年度までは、招聘者の半分近くが旧ソ連・東欧からであったが、2008年度以降は、新学術領域研究とグローバルCOEの影響で、アジア、ヨーロッパ、北米が非常に多くなっている。新学術領域研究では、とくにアジアからの招聘が多く、グローバルCOEではヨーロッパと北米からの招聘が多くなっている。近年は自国の資金により滞在する者も増えている。

		2006年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度
合計		38	67	97	41	87	92	97
財源区分	科研費	2	11	9	9	7	6	1
	新学術	—	—	46	16	26	33	40
	GCOE	—	—	—	9	43	32	43
	21世紀COE	29	35	—	—	—	—	—
	その他	7	21	42	7	11	21	13
招聘地域	旧ソ連・東欧	14	30	15	4	16	24	28
	アジア	7	12	53	19	33	29	25
	ヨーロッパ	7	8	8	10	15	19	16
	北米	9	15	16	6	21	18	15
	中南米	0	0	0	0	0	0	2
	オセアニア	0	0	1	1	1	1	3
	中近東	1	2	4	1	1	1	7
	アフリカ	0	0	0	0	0	0	1

※科研費は、新学術領域研究を除く。

【2006年度】

	旧ソ連・東欧	アジア	ヨーロッパ	北米	中南米	オセアニア	中近東	アフリカ	合計
科研費	0	2	0	0	0	0	0	0	2
新学術	—	—	—	—	—	—	—	—	0
21世紀COE	12	5	5	6	0	0	1	0	29
その他	2	0	2	3	0	0	0	0	7
合計	14	7	7	9	0	0	1	0	38

【2007年度】

	旧ソ連・東欧	アジア	ヨーロッパ	北米	中南米	オセアニア	中近東	アフリカ	合計
科研費	5	3	1	2	0	0	0	0	11
新学術	—	—	—	—	—	—	—	—	0
21世紀COE	15	7	5	6	0	0	2	0	35
その他	10	2	2	7	0	0	0	0	21
合計	30	12	8	15	0	0	2	0	67

【2008年度】

	旧ソ連 ・東欧	アジア	ヨーロッパ	北米	中南米	オセアニア	中近東	アフリカ	合計
科研費	5	1	2	1	0	0	0	0	9
新学術	5	38	1	1	0	0	1	0	46
GCOE	—	—	—	—	—	—	—	—	0
その他	5	14	5	14	0	1	3	0	42
合計	15	53	8	16	0	1	4	0	97

【2009年度】

	旧ソ連 ・東欧	アジア	ヨーロッパ	北米	中南米	オセアニア	中近東	アフリカ	合計
科研費	0	5	2	2	0	0	0	0	9
新学術	1	8	4	1	0	1	1	0	16
GCOE	2	0	4	3	0	0	0	0	9
その他	1	6	0	0	0	0	0	0	7
合計	4	19	10	6	0	1	1	0	41

【2010年度】

	旧ソ連 ・東欧	アジア	ヨーロッパ	北米	中南米	オセアニア	中近東	アフリカ	合計
科研費	1	4	0	2	0	0	0	0	7
新学術	4	13	4	5	0	0	0	0	26
GCOE	10	9	11	11	0	1	1	0	43
その他	1	7	0	3	0	0	0	0	11
合計	16	33	15	21	0	1	1	0	87

【2011年度】

	旧ソ連 ・東欧	アジア	ヨーロッパ	北米	中南米	オセアニア	中近東	アフリカ	合計
科研費	4	0	1	1	0	0	0	0	6
新学術	4	16	4	9	0	0	0	0	33
GCOE	5	11	8	6	0	1	1	0	32
その他	11	2	6	2	0	0	0	0	21
合計	24	29	19	18	0	1	1	0	92

【2012年度】

	旧ソ連 ・東欧	アジア	ヨーロッパ	北米	中南米	オセアニア	中近東	アフリカ	合計
科研費	0	0	0	1	0	0	0	0	1
新学術	13	14	2	7	0	2	2	0	40
GCOE	11	8	11	5	2	1	4	1	43
その他	4	3	3	2	0	0	1	0	13
合計	28	25	16	15	2	3	7	1	97

5. 国際交流

(4) 海外渡航（教員）

以下には、教員の海外渡航について、財源別、派遣地域別に示した。1回の海外渡航で複数の地域を訪問したケースについては、主な派遣地域(原則として滞在が長い地域)をカウントした。

これらの表からも、短期の外国人招聘と同様に、財源としては、21世紀COE、新学術領域研究、グローバルCOEの3つの大型プロジェクトが重要であったことが分かるが、短期の外国人招聘とは異なり、新学術領域研究以外の科研費が大きな役割を果たしていることも分かる。派遣先としては、他の地域も増えているものの、旧ソ連・東欧地域がいずれの年ももっとも多い地域となっている。それに次ぐのは、北米とアジアである。北米については、国際会議への出席が多いのではないかと考えられる。アジアについては、新学術領域研究による派遣が多い。

		2006年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度
合計		36	45	41	57	63	71	72
財源区分	科研費	18	19	14	19	26	24	27
	新学術	—	—	10	20	17	23	28
	GCOE	—	—	—	7	12	13	7
	21世紀COE	13	16	—	—	—	—	—
	その他	5	10	17	11	8	11	10
招聘地域	旧ソ連・東欧	25	19	16	20	23	26	25
	アジア	4	8	6	17	14	17	17
	ヨーロッパ	0	2	5	3	13	9	6
	北米	5	16	13	16	11	17	24
	中南米	0	0	0	0	1	1	0
	オセアニア	1	0	0	0	0	0	0
	中近東	1	0	1	1	1	1	0
	アフリカ	0	0	0	0	0	0	0

※科研費は、新学術領域研究を除く。

【2006年度】

	旧ソ連・東欧	アジア	ヨーロッパ	北米	中南米	オセアニア	中近東	アフリカ	合計
科研費	15	2	0	1	0	0	0	0	18
新学術	-	-	-	-	-	-	-	-	0
21世紀COE	5	2	0	4	0	1	1	0	13
その他	5	0	0	0	0	0	0	0	5
合計	25	4	0	5	0	1	1	0	36

【2007年度】

	旧ソ連・東欧	アジア	ヨーロッパ	北米	中南米	オセアニア	中近東	アフリカ	合計
科研費	8	1	1	9	0	0	0	0	19
新学術	-	-	-	-	-	-	-	-	0
21世紀COE	5	5	1	5	0	0	0	0	16
その他	6	2	0	2	0	0	0	0	10
合計	19	8	2	16	0	0	0	0	45

【2008年度】

	旧ソ連 ・東欧	アジア	ヨーロッパ	北米	中南米	オセアニア	中近東	アフリカ	合計
科研費	7	1	0	5	0	0	1	0	14
新学術	4	3	1	2	0	0	0	0	10
GCOE	-	-	-	-	-	-	-	-	0
その他	5	2	4	6	0	0	0	0	17
合計	16	6	5	13	0	0	1	0	41

【2009年度】

	旧ソ連 ・東欧	アジア	ヨーロッパ	北米	中南米	オセアニア	中近東	アフリカ	合計
科研費	10	3	2	4	0	0	0	0	19
新学術	4	7	1	7	0	0	1	0	20
GCOE	2	2	0	3	0	0	0	0	7
その他	4	5	0	2	0	0	0	0	11
合計	20	17	3	16	0	0	1	0	57

【2010年度】

	旧ソ連 ・東欧	アジア	ヨーロッパ	北米	中南米	オセアニア	中近東	アフリカ	合計
科研費	11	5	5	5	0	0	0	0	26
新学術	4	4	5	3	1	0	0	0	17
GCOE	5	1	2	3	0	0	1	0	12
その他	3	4	1	0	0	0	0	0	8
合計	23	14	13	11	1	0	1	0	63

【2011年度】

	旧ソ連 ・東欧	アジア	ヨーロッパ	北米	中南米	オセアニア	中近東	アフリカ	合計
科研費	13	2	1	8	0	0	0	0	24
新学術	9	5	3	4	1	0	1	0	23
GCOE	2	4	4	3	0	0	0	0	13
その他	2	6	1	2	0	0	0	0	11
合計	26	17	9	17	1	0	1	0	71

【2012年度】

	旧ソ連 ・東欧	アジア	ヨーロッパ	北米	中南米	オセアニア	中近東	アフリカ	合計
科研費	12	3	1	11	0	0	0	0	27
新学術	8	9	4	7	0	0	0	0	28
GCOE	2	2	0	3	0	0	0	0	7
その他	3	3	1	3	0	0	0	0	10
合計	25	17	6	24	0	0	0	0	72

5. 国際交流

(5) センター教員の国際学会等での役員、編集委員

センターの教員による国際的な活動としては、国際学会や国際的学術誌に関係して、役員や編集委員を務めるケースが数多く見られる。以下はそのリストである。

氏名	学会・学術誌名	役職	期間
家田修	East European Countryside	Advisory council member	2003年～
	Forum on Public Policy, A Journal of the Oxford Round Table	Editorial advisory board member	2010年～
岩下明裕	ABS (Association for Borderlands Studies)	副会長	2013年～2015年
	ABS (Association for Borderlands Studies)	会長	2015年～
	BRIT第12回大会	コーディネーター	2012年
宇山智彦	Central Eurasian Studies Review (Central Eurasian Studies Society)	Editor-at-large	2007年～2009年 (2010年から休刊)
田畑伸一郎	Eurasian Geography and Economics	Editorial board member	1990年代～
	Post-Soviet Affairs	Editorial board member	2012年度～
野町素己	国際スラヴィスト会議スラヴ諸語文法構造研究部会	委員	2011年～
	国際スラヴィスト会議スラヴ諸語アспект研究部会	委員	2011年～
松里公孝	International Council for Central and East European Studies	副会長	2010年～
	Europe-Asia Studies	International associate editor	2011年～
	Ab Imperio	Editorial board member	2000年～
	The Soviet and Post-Soviet Review	Editorial board member	2010年～
	Journal of Eurasian Studies	Editorial board member	2010年～
望月哲男	国際ドストエフスキー学会	大会組織委員・東アジア地域代表	2007年～2013年

(6) 主な国際学会でのパネル組織

センター教員は、国際学会において報告するだけでなく、日本あるいは外国の共同研究者とともにパネルを組織するケースも数多くある。これらは、日本の研究成果の国際的な発信に大きく貢献している。これらは、多くの場合、新学術領域研究やグローバル COEなどを財源としている。

氏名	学会等名	パネル名	開催地	期日
岩下明裕	ABS年次集会	Borders in Representation: Case of Museum Exhibition at the Hokkaido University Museum	Reno (USA)	2010年 4月14～17日
宇山智彦	Central Eurasian Studies Society, Ninth Annual Conference	Local and Regional History of Central Asia	Washington, D C (USA)	2008年 9月20日
	Empire in Modernity: A Comparative Perspective	The First Congress of the Asian Association of World Historians	Osaka (Japan)	2009年 5月31日
田畑伸一郎	38th National Convention of the AAASS	Reappraisal of Sustainable Economic Growth in Russia	Washington, D C (USA)	2006年 11月18日
	39th National Convention of the American Association for the Advancement of Slavic Studies	The Flow of Financial Resources in Russia	New Orleans (USA)	2007年 11月18日
	10th Bi-annual Conference of the European Association for Comparative Economic Studies	Accumulation and Utilization of Russian Budget Surplus	Moscow (Russia)	2008年 8月29日
	40th Convention of the AAASS	Russia's Dependence on Oil and Gas (1) and (2)	Philadelphia (USA)	2008年 11月20～21日
	41st Convention of the AAASS	Sustainability of Russian Economic Growth (I) and (II)	Boston (USA)	2009年 11月13日
	ICCEES VIII World Congress	Russian Economic Growth under the New World Economic Order (1) and (2)	Stockholm (Sweden)	2010年 7月28～29日
	11th Bi-Annual Conference of European Association for Comparative Economic Studies	The Possibility of Sustainable Economic Development: China, India and Russia	Tartu (Estonia)	2010年 8月27日
	42nd annual convention of Association for Slavic, East European and Eurasian Studies	Can the Russian Economy survive in the Competition among the BRICs? (1) and (2)	Los Angeles (USA)	2010年 11月19日
	43rd annual convention of Association for Slavic, East European and Eurasian Studies	Comparative Analysis of the Russian Economy in Eurasian Perspective (1) and (2)	Washington, D C (USA)	2011年 11月19～20日
	Joint conference by the Association for Comparative Economic Studies (ACES), the Japanese Association for Comparative Economic Studies (JACES) and the Society for the Study of Emerging Markets (SSEM) on "Economic and Financial System Development in the Pacific-Rim Region"	Sustainable Growth in the Pacific Rim Region	Honolulu (USA)	2012年 5月18日
	12th Bi-Annual Conference of European Association for Comparative Economic Studies	Development with Instability in Eurasian Gigantic Emerging Economies (1) and (2)	Paisley (Scotland)	2012年 9月7日
44th annual convention of Association for Slavic, East European and Eurasian Studies	Real and Monetary Instability in Transition in Eurasia (1) and (2)	New Orleans (USA)	2012年 11月17～18日	

5. 国際交流

長縄宣博	39th National Convention of the American Association for the Advancement of Slavic Studies	Imperial Subjects and Cross-Cultural Contacts at the Border: Reconfiguration of Self in 19-20th Century Caucasus and Volga-Ural	New Orleans (USA)	2007年 11月15日
	40th Convention of the AAASS, Marriott Downtown Philadelphia	Mobility across Empires: Muslim Travelers and the Russian and Ottoman States (1)	Philadelphia (USA)	2008年 11月21日
	42nd Annual Meeting of the Middle East Studies Association	Mobility across Empires: Muslim Travelers and the Russian and Ottoman States (2)	Washington, D C (USA)	2008年 11月25日
	ICCEES VIII World Congress	Religions, State and Modernity in Volga Ural History (The Nineteenth to Twentieth Centuries)	Stockholm (Sweden)	2010年 7月27日
	42nd annual convention of Association for Slavic, East European and Eurasian Studies	Building the Russian Empire: A View from the Ground Floor	Los Angeles (USA)	2010年 11月19日
	44th annual convention of Association for Slavic, East European and Eurasian Studies	Revolutions across Imperial Borders: Diplomacy and Local Politics in the Early Twentieth Century	New Orleans (USA)	2012年 11月16日
野町素己	ICCEES VIII World Congress	The Grammar of Possessivity in South Slavic Languages: Areal and Typological Approaches	Stockholm (Sweden)	2010年 7月28日
	ICCEES VIII World Congress	The Typology of Grammatical Changes in the Context of Slavic-German Language Contact	Stockholm (Sweden)	2010年 7月30日
	43th ASEES Annual Convention	Language Decay or Language Revitalization? The Case of Minor Slavic Languages between the Language of Authority	Washington, D C (USA)	2011年 11月17～20日
	44th ASEES Annual Convention	Trans-border Language Politics and the Status of Minority Languages in the South Slavic Space Today	New Orleans (USA)	2012年 11月16日
松里公孝	American Association for the Advancement of Slavic Studies (AAASS), 38th National Convention	Spatial Approaches to Eurasian Islam: Its Peculiarities and Dynamics	Washington, D C (USA)	2006年 11月16～19日
	AAASS, 39th National Convention	Domestic Politics of the Unrecognized States: Transnistria and Abkhazia	New Orleans (USA)	2007年 11月15～18日
	AAASS, 40th National Convention,	Trans-Border Politics in the Black Sea Rims	Philadelphia (USA)	2008年 11月20～23日
	First East Asian Conference for Slavic Eurasian Studies	Oligarchy or Personal Power: Russia and Ukraine in the 21st Century	Sapporo (Japan)	2009年 2月5～6日
	International Council for Central and East European Studies, 8th World Congress	Religions and Cultural Geopolitics in the 21st Century	Stockholm (Sweden)	2010年 7月26～31日
	3rd East Asian Conference for Slavic Eurasian Studies	Comparison of Politics in Regional Powers: Russia, China, and India	Beijing (PRC)	2011年 8月27～28日
	ASEES 43rd Annual Convention,	Politics in Regional Powers: Russia, China, and India	Washington, D C (USA)	2011年 11月17～20日
	4th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies	Regional Conflicts in Eurasia: Political Violence as a Factor of Domestic Politics: Dagestan, South Ossetia, and Transnistria	Kolkata (India)	2012年 9月4～5日
	5th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies	To Move or Not to Move, This Is the Question of Political Regimes in South Caucasus	Osaka (Japan)	2013年 8月9～10日
望月哲男	ICCEES 2010	Sorokiniada: Vladimir Sorokin and Contemporary Russian Literature	Stockholm (Sweden)	2010年 7月28日

(7) 海外の研究機関・研究者との共同研究

センターの教員が外国の研究者とともに本を出版するなど、共同研究を行っているケースも数多くある。以下は、それらのリストである。

氏名	プロジェクト名	主な共同研究者	共同研究機関	期間	備考
宇山智彦	Islam, State, and Society Across the Qazaq Steppe (18th – early 20th centuries)	Paolo Sartori		2009～2013年	成果はオーストリア科学アカデミー出版会から刊行
		Niccolò Pianciola			
田畑伸一郎	Russia's Energy Policies: National, Interregional and Global Dimensions	Pami Aalto	University of Tampere	2009～2012年	
長縄宣博	Volgo-Ural'skii region v imperskom prostranstve: XVIII-XX vv (帝国空間の中のヴォルガ・ウラル地域: 18-20世紀)	Diliara M Usmanova		2008～2011年	成果はモスクワの Vostochnaia Literaturaより2011年に出版
		Charles R Steinwedel			
		Gul'mira S Sultangalieva			
		Ismail Türkoğlu			
		Xavier le Torrivellec			
	Mobility in Russia and Eurasia	John Randolph	University of Illinois at Urbana-Champaign	2009～2010年	The U S Department of State Title VIII Program
		Willard Sunderland			
		Sean Pollock			
	Ispovedi v zerkale: mezkhkфессионаl'nye otnosheniia v tsentre Evrazii, na primere Volga-Ural'skogo regiona (XVIII-XXI vv) (鏡の中の告白: ユーラシア中心部での諸宗教間関係: 18世紀から21世紀のヴォルガ・ウラル地域を事例(こ))	Stéphane A Dudoignon	ロシア・フランス人文社会科学センター(在モスクワ)	2010～2012年	
		Xavier le Torrivellec			
Ol'ga N Seniutkina					
Central Asian Pilgrims: Hajj Routes and Pious Visits between Central Asia and the Hijaz	Alexandre Papas		2010～2011年	成果はベルリンのKlaus Schwarz Verlagより2012年に出版	
	Thomas Welsford				
	Thierry Zarcone				
Russia's Great War and Revolution, 1914-1922: The Centennial Reappraisal The Home Front: Politics, Economy and Society in War and Revolution	Christopher Read		2010年～現在	成果はアメリカのSlavica Publishersから近刊予定	
	Adele Lindenmeyr				
	Liudmila Novikova				
	Peter Waldron				
	Sarah Badcock				
	Aaron Retish				
野町素己	Languages and Borders in the Slavic World	Tomasz Kamusella,	University of St Andrews	2009年～現在	Palgrave社から研究成果の論集が出版予定
	Grammaticalization and Lexicalization in Slavic Languages	Andriy Danylenko	Pace University	2011年～現在	Otto Sagner社から研究成果の論集が出版予定
松里公孝	Research on the Unrecognised States in the Post-Soviet Space		華東師範大学	2012～2014年	中華人民共和国・文部省・科学研究費補助金(No 11JJDGW010)の研究代表者。拠点は華東師範大学。
家田修	EU統合と境界を跨ぐ地域社会の形成: ドナウ川を挟むスロヴァキア・ハンガリー国境地帯を共生の視点から問い直す		Selye大学(スロヴァキア)とトヨタ財団による共同研究	2009～2012年	
	Multilevel Constitutionalism and the Nation State: Conflicting Constitutional Identities in Hungaryに 関する共同研究		エトヴェッシュ・ロラント大学社会科学部欧州研究学科(ハンガリー)	1987年～現在	

5. 国際交流

(8) ICCEES への貢献

JCREES(日本ロシア東欧研究連絡協議会。第3章(6)参照)の設立によって、日本のスラブ・ユーラシア研究諸学会は、横の連携を強めると同時に、世界組織である ICCEES(国際中欧・東欧研究協議会)に代表権を持つことになった。2005年以降、JCREESをICCEESで代表するのはセンターの松里公孝であり、松里はICCEESの副会長および幕張世界大会(後述)事務局長を務めている。

2008年にソウル大学において行われたソウル大学・北海道大学ジョイント・シンポジウムの際に、日中韓のスラブ学会サミットが開催された。その決定に基づいて、第1回のスラブ・ユーラシア研究東アジア・コンフェレンスが北海道大学で開催されたが、その組織の中心に立ったのは、センターであった。その後、東アジア・コンフェレンスは、2010年にソウル、2011年に北京、2012年にコルカタで開催され、2013年は日本に戻ってきて大阪経済法科大学で開催された。

東アジア・コンフェレンス以外にも、2008年における韓国学会とICCEESの関係正常化、中国学会のICCEES加盟、2012年のモンゴルにおけるスラブ研究全国学会の成立などは、センターが直接働きかけたものではないにせよ、これまでセンターがアジアで築きあげてきた研究ネットワークを生かして実現されたものである。こうした東アジアでの活動が評価されて、2015年のICCEES世界大会は、ICCEESの歴史上初めて欧米外の日本(千葉幕張)で開催されることになった。この誘致および初期準備段階において、センターが多大な支援を行った。

(9) 学術交流協定

センターは、数多くの外国の研究機関と密接な研究協力を行っているが、そのような研究機関とは、学術交流協定を締結することが多い。以下には、北海道大学が締結している大学間交流協定のなかで、センターが提案部局になって主導的に研究協力を行っているもの、あるいは、関係部局として他の部局とともに交流を進めているもの、さらに、センターが部局間交流協定を結んでいるもののリストを示した。これに関連することとしては、2012 年度にヘルシンキ大学に開設された北海道大学ヘルシンキオフィスの所長をセンターの田畑伸一郎が務めており、北海道大学とセンターのヨーロッパ(ロシアを含む)の研究機関との交流拡大に貢献している。

大学間交流協定

締結年月日	相手国	機関名	提案部局	関係部局
2001年12月11日	フィンランド	オウル大学		○
2004年11月4日	ハンガリー	ブダペスト工科経済大学		○
2007年10月23日	ロシア	サハリン国立大学		○
2007年11月12日	ロシア	極東連邦大学		○
2008年10月28日	エストニア	タルトゥー大学	○	
2009年7月23日	ロシア	ロシア科学アカデミー極東支部		○
2010年3月30日	ロシア	イルクーツク大学		○
2011年5月10日	セルビア	ベオグラード大学	○	
2011年10月10日	ロシア	モスクワ国立大学		○
2012年4月2日	ロシア	北東連邦大学		○
2013年4月18日	ロシア	サンクトペテルブルグ国立大学	○	

部局間交流協定

締結年月日	相手国	機関名
1992年6月1日	アメリカ	ハーバード大学 ロシア・ユーラシア研究センター
1994年1月1日	オランダ	ライデン大学 東欧法律・ロシア研究所
1994年9月1日	中国	中国社会科学院(北京) 東欧・ロシア・中央アジア研究所
1995年9月1日	フランス	フランス国立東洋語東洋文化研究所 ロシア・ユーラシア研究センター
2004年3月1日	イギリス	オックスフォード大学セント・アントニーズ校 ロシア・ユーラシア研究センター
2005年1月1日	ロシア	国立カザニ・エネルギー大学 経済学・社会工学研究所
2005年10月1日	ロシア	ロシア科学アカデミー 東洋学研究所
2006年6月1日	ロシア	ロシア科学アカデミー スラブ学研究所
2008年4月25日	ロシア	ロシア科学アカデミー 極東支部極東諸民族歴史・考古学・民俗学研究所
2010年6月1日	中国	中国黒竜江省社会科学院
2011年4月1日	ロシア	ロシア科学アカデミー ロシア文学研究所(プーシキンの家)
2012年7月30日	ロシア	ロシア・カルムイク国立大学